



## 京都府立医科大学 125周年記念誌の刊行によせて

京都府知事 荒 卷 禎 一

京都府立医科大学が、創立125周年を迎えられましたことを心からお喜び申し上げます。

本学は、明治5年にその前身である京都療病院として開設されて以来、府民の生命と健康を守る中核的施設として重要な役割を果たすとともに、数多くの優秀な医師や医学者を世に送り出し、我が国の医学の発展に大きく貢献してまいりました。なかでも、戦後、学制改革を経て、大学としての体制を整えてからは、その高度な教育、研究の成果及び医療を地域に還元するため、昭和46年に医療センターを設置し、今日まで多数の医師を府内全域での医療の担い手として派遣して来られたことは、本学の医療の実践として特筆されるべきことであると存じます。本学がここまで発展してまいりましたのも、ひとえに歴代の学長先生をはじめ、本学関係者の方々の御努力と、御理解、御支援のたまものであり、心から敬意と感謝の意を表する次第であります。

近年、社会が目まぐるしく変化・進展する中で、医学・医療の現場でも驚くほどの変革が進み、より高度なものが求められるようになってまいりました。そのため、京都府では、昭和56年に策定した「京都府立医科大学整備基本計画」に沿って、中央診療施設、附属小児疾患研究施設、附属病院病棟、附属図書館、基礎医学学舎など、医学教育施設・医療施設を逐次整備し、さらには附属脳・血管系老化研究センターの開設や医療技術短期大学部の開学などにより、医科大学としての総合的な整備を進めてまいったところであります。

これらの施設からは、すでに数々の成果が生み出されておりますが、人類がかつて経験したことのない高齢社会を迎え、疾病構造の変化や健康に対する意識の変化、平成12年度からの介護保険制度の導入など、医学・医療は常に未踏の分野への対応が求められているところであり、本学に求められる高度で多様な医療需要もますます高まってくるものと思われまます。本学においては、早くから医学だけでなく人間学や社会学の視点も取り入れた研究や、臓器移植や遺伝子組み替えなどの研究にも取り組まれておられますが、さらに素晴らしい成果の生まれること

が期待されるところであります。

しかし、医学が進歩すればするほど、医療に携わる者としては一層人間の尊厳が大切にされなければならないことは言うまでもありません。本学が療病院から始まったというその歴史を大切にされ、これまでも増して、府民の皆様から信頼される人間性豊かな医療人の育成にあたっていただきたいと願っております。

京都府立医科大学の125年の歴史を顧みるとき、私は、本学の関係者の皆様と共に常に京都府民の存在があり、一緒になって築いてきたものだとの思いを深くし、そのことを誇りに思っているものであります。本誌が、こうした本学の歴史を振り返り、数多くの先輩たちの優れた活躍や苦難の跡に思いをめぐらせながら、新たな時代に向けてさらなる前進を期するよすがとなりますことを願うとともに、京都府立医科大学が日本のみならず世界をリードする医学・医療の中核施設として、ますます発展されますことを心から祈念いたしまして、私のあいさついたします。



## 125周年記念誌の刊行によせて

京都府立医科大学学長 栗山欣弥

京都府立医科大学創立125周年記念式典が1997年11月2日、京都市左京区宝ヶ池の国立京都国際会館メインホールで盛大に催されたことは、私共の記憶になお新しいところである。1972年に創立100年の輝かしい節目の年を祝った本学にとって、今後1/4世紀ごとに記念式典を催し、この輝かしい歴史を回顧すると共に、将来への活力として行こうとの合意のもとに大学と学友会が共催した125周年記念式典が、成功裡に終了したことは何よりも喜ばしいことである。次の150周年記念式典がより盛大に開催され、またこの間に本学及び学友会が益々発展することを、心から祈念したい。

本書は、1973年に刊行された“京都府立医科大学百年史”の続編として、その後の25年間の本学の歩みを記録したものである。本学の歩みのみならず、学友会の歩みはもちろん、本学の医療センターや京都府医学振興会の歩みまで網羅されており、後世の人達にも重要な資料としての意義を持つものと考え。この様な意味からも、森本武利教授を中心とする本学創立125周年記念誌編纂委員会の皆様のご努力に心から敬意を表すると共に、感謝致す次第である。

この25年間の記録をみると、本学は京都府及び京都府民、関連の諸機関、医学・医療界の皆様などの力強い支援を得ながら、早いピッチで、しかも着実な歩みを続けてきたことは明白である。次の25年間も、そしてまた永遠に、本学が同様な栄光の道を歩み続けることを信じている。



## 母校創立125周年記念誌の 刊行を祝う

京都府立医科大学学友会会長 吉田幸雄  
創立125周年記念事業実行委員長

我らが母校、京都府立医科大学は平成9年、創立125周年を迎え、菊花薫る11月2日、盛大なる記念式典並びに祝典が催されましたことはなお記憶に新しいところでもあります。顧みますると、四半世紀毎に行うと予定されたこの大いなる節目にいかなる記念事業を行うべきかについて、学友会におきましては平成6年より記念事業検討委員会を設置し、大学と密接な連絡を取りつつ慎重な討議を重ねて参りましたところ、平成8年ようやく成案を得、同年6月、実行委員会が発足致しました。その内容は、①記念式典・祝典の開催、②母校開学以来の歴史的資料の整理・保存ならびに125周年記念誌の刊行、③学友会館(青蓮会館)の全面改築、を三本柱とするというものであり、この目的達成のため6億円を目標とした募金活動が開始されました。

爾来2カ年有余が経過しましたが、その間、愛校の熱情溢る多くの学友のご支援により、まず盛大なる記念式典・祝典が上記のごとく無事終了し、今また第二の柱である記念誌の刊行を見るに至りました。この事業は、我が国有数の長い歴史を持つ本学が所蔵する貴重な資料をこのまま放置すれば風化、霧散し、我が国近代医学黎明期の資料を失い、本学のみならず本邦医学史上の損失にもなるという危機感に端を発したものであります。この事業は並大抵の苦勞では済まないことは誰しも承知していましたが、幸い本学史にかねてより造詣の深い森本武利教授がこの難事業を買って出てくださり、委員会を組織し、同志とともに寝食を忘れてその急速なる完成に挺身されました。その結果、かくも速やかに、かつ充実して誇らしく世に出ましたことは感謝してもしきれぬほどであります。

そもそもわが学友会の沿革をたどれば、明治29年12月設立の校友会にたどりつきます。当初は学生を主体とし、それに教員・卒業生を加えたものでありましたが、その後、時代と共に変遷し今日の卒業生を主体とする学友会となりました。しかしその愛校の精神は一貫して変わらず受け継がれています。本学は官学のようにポンと予算がついて出来ていったものではありません。創立の当初から民衆の拠金によって支えられ、予算の不足から廃校の議論がなされたことも、また大学昇格が危ぶまれたこともありました。その都度奮い立ったのは校友会であり学友会であったことは本学八十年史、百年史につまびらかであります。すなわち愛校の精神はどここの大学にも劣らぬものと自負いたします。

幸い、昭和56年、設置者による京都府立医科大学整備基本計画が策定され、当初、総工費約350億円、その後恐らく2倍近くに膨れ上がったと予想される巨費を投じて病院並びに大学部門の全面改築が行われ、17年後の今日ほぼその完成を見るに至っております。このことは誠に喜ばしく感謝に堪えないところでありますが、しかし教職員・学生などの憩いの場となる福利厚生施設は未だその実現を見ておりません。我々がこの度の記念事業の第三の柱に掲げた学友会館の建設はそのような意義をも含んでおります。

学友会員が諸々の行事を行うのに使用するのは勿論であります。母校の教員と学生が、先輩と後輩が膝を交え、学術的・教育的あるいは懇親的交流を行う場として本館を提供することは、21世紀において人間性あふるる医師を育てる意味においても少なからざる貢献を果たすに違いないとの願いが込められています。このような理念と希望の下に募金委員はじめ各役員のだよまざる努力が続けられており、目下、多くの学友諸兄姉より続々と基金が寄せられ、また関連病院や企業からの協賛が得られつつあります。必ずや近い将来目標額を達成し、建設の槌音を聞く日が来るものと信じます。学友諸賢のさらなるご理解とご協力を切望するものであります。

(平成10年11月3日)

